

日本の中国観—中世・近世—

—日中比較文化学の視点—

藤 田 昌 志

日本の中国観—中世・近世—

—日中比較文化的研究—

FUJITA Masashi

【摘要】

日中関係在历史上不能说是经常一帆风顺的。日本对中国还保持着原有的自己近代化相当先进的观念。中国在经济发展以前对日本怀有憧憬的观念随着中国的经济发展渐渐减少，有了和美国平起平坐的思想。日本媒体特别是电视报告和电视解说人员很大地影响到日本的中国観。所以我们现在再一次从历史上了解古今日本的中国観很有意义。本研究从比较文化学的观点来考察日本从中世到近世的中国観。

キーワード：蒙古襲来 義満の体面軽視外交 秀吉 「神儒仏」思想 「蕃夷」

一、序

日中関係は良好なときばかりとはいえない。日清戦争以来の日本の中国への軽侮的ムードは解消されていないし、中国の経済成長以前に、中国が持っていた日本への憧憬の念は減少し、アメリカと対等に伍していくことを中国は意識するようになった。中国の軍事費の増大はその証左である。日中関係は中米関係等に左右されることも多い。日本の中国観は90%以上がマスコミ、とりわけテレビ報道やテレビのコメンテーターによって醸成されているという偏りがあるが、根底には日本人のムーディーな文化的傾向が存在する。今一度、通時的、歴史的に日本の中国観を通観し、あるべき関係を模索してみたい。本稿では中世から近世までの日本の中国観を比較文化的に、マクロ的に日本の歴史に即して考察してみたい。以上、序とする。以下、各論に移る。

二、中世（12世紀末～16世紀）の日本の中国観

僧兵の鎮圧や保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）の際に貴族内部の争いを武士の力で解決したことによって12世紀中葉、台頭した武家の棟梁である平清盛は外戚（天皇の姻族もしくは母の一族）となり、荘園も多数持ち、摂関家に似ていた。平氏政権は武士でありながら貴族的性格が強かった。清盛は1179年、後白河法皇と対立し、法皇を幽閉し、多数の貴族を処罰したため、そのことが反対勢力の結束を促し、平治の没落を早めた。清盛は日宋貿易を行い宋の文物を日本に多数もたらした。

1180年、平氏は奈良の東大寺・興福寺などを焼き払った。朝廷や貴族は再建にとりかかったが、1195年に東大寺の大仏殿落慶法要が盛大に営まれ、かねてから援助してきた征夷大將軍源頼朝が鎌倉から遠路はるばる儀式に参列した。東大寺の再建は新しい時代の幕開けを象徴するものであった。

所領の支配権を強化、拡大しようとした地方の武士団は次々と立ち上がり、1185年、平氏は源頼朝の命を受けた源義経に攻められ、壇ノ浦で滅亡した。後白河法皇の死後、源頼朝は1192年、征夷大將軍に任ぜられ、武家政権の鎌倉幕府を開いた。

朝廷と幕府の二元的支配が鎌倉幕府成立後、続いた。1221年の承久の乱は朝廷勢力の幕府への巻き返しであったが、後鳥羽・土御門・順徳の3上皇は配流され、仲恭天皇の廃位が行われ、乱は幕府側の勝利に終わった。これによって幕府優位の状態となったが、源氏が3代で絶えると、北条氏による執権政治が行われるようになり、北条氏独裁の性格を強めていった。

武士は地頭などの現地管理者として所領を支配し、耕地の開発を進め、その生活は質素で武芸が重視され、日頃から馬上の弓術を習練した。

12世紀後半から精神面の新しい機運が生じ、従来の鎮護国家のための貴族仏教から、広い階層を基盤とする鎌倉仏教が興り、修行方法を簡素化、一元化した。法然の専修念仏を発展させた親鸞の浄土真宗、日蓮による法華経最大一の、題目を唱えることを修行方法とする日蓮宗、座禅を修行法とする臨済宗、曹洞宗などが誰にでも平等にできる修行法を提示し、広く武士や庶民に門戸を開いた。

文学の世界でも新しい動きが生じ、西行は清新な秀歌を詠み、鴨長明はこの時代の初めに中世的隠者文学『方丈記』を著し無常観を説いた。

吉田兼好はこの時代の末に出て随筆の名作『徒然草』を著した。和歌では貴族文学の最後の輝きとして『新古今和歌集』が編纂され、技巧的表現をこらし、観念的な美の境地（月を象徴的に表現する浄土教的な美の境地）を生み出そうとした。彫刻の分野では運慶、湛慶父子や快慶がすぐれた仏像（ex、東大寺南大門金剛力士像）や肖像の彫刻を作り出した。

13世紀の初め、チンギス=ハンはモンゴル民俗を統一し、その後継者はユーラシア大陸に大帝国を建設した。チンギス=ハンの孫、フビライは国名を元とし、日本にたびたび朝貢を強要した。元の対日軍事行動はベトナム方面への蒙古(=元)の軍事行動がやや収束した時期に行われ、また宋の軍隊が元軍のもとに次々と下り、降伏した宋の将軍や兵士の忠誠度をどのように確保するかという問題が生じた時期と重なっている⁽¹⁾。

蒙古は宋に対して和戦両用の構えをとり、それは同様に日本に対しても適用された。蒙古は文永の後(1174年)に先立って、何回か日本へ使節を送りこみ、蒙古に従属するように働きかけており、蒙古襲来(=元寇)は日本・蒙古間の外交交渉の決裂した結果であると言える。

蒙古が初めて日本に使者を立てたのは1266年の8月である。しかし、蒙古と日本の間に入って戦闘にまきこまれるのを恐れた、嚮導(案内)役を蒙古から要求された高麗は、海を渡ることの危険や日本が小国でとるに足らぬ上に危害を及ぼしかねない国だからと言って蒙古の使節に日本渡航を断念させる。しかし、蒙古はあきらめず翌年8月、再び高麗経由で使節を派遣し、1268年1月高麗の使節藩阜が対馬経由で博多に来訪、蒙古と高麗の国書を日本へ提出する。国書は鎌倉の幕府に、そして幕府から朝廷に提出される。国書の日付は1266年8月で途中で引き返した先年の使節の書簡であった。そのことは蒙古が高麗の意向を全く無視したことを意味している。高麗使節藩阜は流人(彩雲島に流された)で、蒙古は高麗への懲罰的意味も兼ねて、高麗人を日本へ派遣したものと思われる。国書には、高麗がすでに蒙古の藩属国になったことに言及し、日本も蒙古と修交すべし、修交しなければ兵力でこれを実現する、兵力を用いるのは好むところではないとの趣旨が述べられていた。これに対して朝廷は、返事を出さないことに決する。

蒙古はこうした日本の対応を見た上で、1269年3月、蒙古、高麗双方の使節を含めた70名前後の大使節団を対馬に送りこむ。蒙古には高麗と蒙古の同盟関係を日本に知らしめ、また蒙古の力を誇示する意図があったものと思われる。依然、日本側の回答が得られないので対馬の島人二人を人質として拉致し連れ去った蒙古は、1269年9月、使者于婁大が拉致した二人を連れ、二人の高麗人を同伴して来日し、蒙古の高官の書簡を日本側に渡した。これに対して、日本側は今回も結局、何も返答しなかった。

蒙古は懲りずに、1271年9月、蒙古に仕える女真人趙良弼に軍人数名を随行させ、九州今津に来日させた。信書には返事の督促と同時に、兵を用いる可能性にも言及してあった。しかし、今回も日本は以前同様、終始かたくなな態度をとり返書すら出さなかった。その理由として識者は次の三つを挙げる。①蒙古や大陸情勢に疎く返書の出しようがなかった。②異国の日本攻略に対して、日本国内で精神的ひきしめを行い、祈祷によって敵を退散さ

せようという一種の神頼みの方策を採った。換言すれば、穢れ^{けが}として敵を遠ざけ、接触を断ち、精神をひきしめて祈禱を純粹なものとし、神頼みで危機を乗り越えようとした。③政治的要因。日蓮の『立正安国論』も存在する当時、幕府が弱味を見せて交渉すれば、幕府の軟弱さが非難され、幕府は国を救えないという批判を浴びる恐れがあった。国内へのそうした政治的考慮が強く働いたので、幕府は強硬姿勢をとらざるを得なかった⁽²⁾。

幕府の強硬策の裏には、更に根深い、国内政局上の権力闘争との関係があったと識者は言う。1272年、二月騒動（＝執権北条時宗とその異母兄時輔^{ときすけ}が、名越氏などの有力豪族をまきこんで対立した政治権力闘争）を経験した幕府は、この時代、時宗の政治権力の安定性が高くなく、元朝使節の来日時期が国内政治上の内部、抗争の時代とほぼ一致していたので、使節の対応を誤ると国内政治上の抗争と結びつきやすい状態にあった。更に朝廷と幕府間には外交権をめぐる駆け引き^{かけひ}があり、こうした状況下では、対外的強硬路線を維持すべしという主張が勢いを得るのは自然な流れであった。換言すれば、国内政治上の実際は、潜在的抗争の種をかかえているとき、国論を強硬論で統一するのは抗争に蓋^{ふた}をする意味でも重要であった⁽³⁾。

1274年の文永の役後も、元は和戦両用作戦をとっている。すなわち、1275年4月、日本が元と修好しないことを責め、服従しない場合、軍事力行使をほのめかしたと思われる国書⁽⁴⁾を送達してきたし（幕府は9月、5人の使節団を鎌倉で斬首）、1279年6月に元は宋の降将范文虎^{ファンウエンフ}に日本攻略を命じるが、范は部下の二人を博多に派遣し、日本の服従を勧告する文書を日本側に送達している。

しかし、この元の両面外交は裏目に出て、日本側は滅亡した宋王朝の旧臣が日本政府に書簡を送るのは無礼であるとして、元の使節を博多で斬首に処した。

文永の役後、日本の元への対応はますます硬化するが、「日本の元に対する強硬策が一層強化されてゆく過程は、日本を神国とみなす、神国思想の強化の過程と結びついていた」⁽⁵⁾ことには注意する必要がある。それは国内の団結を維持するという大義名分のための思想統一であるとともに、日本の防衛に従事する幕府は神国思想をまとうことによって、単に権力の中心だけでなく権威を授けられた主体ともなり得たということである。そして、一端、戦端が開かれると、軍事的権力は増々、権威を身につけようとし、そうすればするほど軍事的政権の威信と意地とが対外的対応を硬直化させてゆくのである⁽⁶⁾。歴史はくり返す。「明治維新の際の尊王攘夷論は、あきらかに徳川幕府と雄藩との間の権力闘争とむすびついており、それが幕府の対外政策に大きな制約を与えていたことにも類似している。そして1930年代の日中戦争へ突入する過程においても、軍部の政治権力と政府、政党との間の権力抗争が、日本の対中政策から柔軟性を奪う一因であったことを想起せねばなるまい。」⁽⁷⁾

という識者の言辭は正鵠^{せいこく}を射ている。

内藤湖南は「日本文化の独立」（1922年（大正11）5月講演）で鎌倉時代の変わり目頃から社会の状態が大きく変化して、武家が台頭し、思想上、宗教上の変化も起こり皇室や公家の中にもそれに呼応するような、復古思想を持つ革新の気運の代表である後宇多天皇や後醍醐天皇のような人が出てきたと述べている。また、湖南はこうした「内部における革新の機運」に呼応するかのように外部において「蒙古襲来」が起こったことに注目している。「日本文化の師匠」と仰いでいた「支那」が「犬の子孫」（筆者注：奈良の西大寺興生菩薩が石清水八幡で尊勝陀羅尼法を修するとき、蒙古を指して言った言葉）である蒙古に亡ぼされてしまい、その蒙古が日本に襲来したが、日本の神々に祈願して日本が勝った、これが「日本くらい尊い国はないといふ」当時の新思想となり、それが根本となって日本文化の独立が出来たとしている⁽⁸⁾。

皇室は鎌倉中期以後、持明院統と大覚寺統に分かれていたが、14世紀初め、幕府は両統が交代で皇位につく方式を定め（両統迭立^{てつりつ}）、朝廷の政治に介入した。大覚寺統の後醍醐天皇は天皇親政、討幕を目論み、1331年挙兵を企て失敗し隠岐^{おき}に流された。しかし、楠正成らが畿内の反幕府勢力を結集して、幕府軍と戦い、やがて天皇も隠岐を脱出し、状況を見た幕府軍の足利尊氏も反旗を翻し、六波羅探題を攻め落とす。関東でも新田義貞が鎌倉に攻めこみ、北条氏一族を亡ぼし、1333年鎌倉幕府は滅亡する。

京都に帰り建武の新政を行った後醍醐天皇の独裁的色彩の濃い政治は多くの武士の不满、抵抗を引き起こし、足利尊氏に持明院統の光明天皇への譲位をせまられ、後醍醐天皇は吉野山中に逃れ、建武の新政はわずか3年足らずで崩壊する。その後、動乱が続いたが尊氏のひ孫、義満が將軍になる頃、動乱はようやく収まり、1392年、南北両朝の合体を実現して、内乱に終止符を打った。義満は全国的な統一政権、室町幕府を作ったが、動乱の中で、地方武士の力が増大し、それら地方武士を統括する役割の守護が地域的支配権を確立し守護大名となり守護領国制の支配体制を作り上げる。守護大名の弱い地域では国人^{こくじん}と呼ばれた地方武士の自立の気風が強く、力をつけてきた農民を支配するために国人一揆を結成した。

中国では1368年、朱元璋^{しゅげんしやう}（太祖洪武帝^{たいそこうぶてい}）が漢民俗王朝、明^{ミン}を建国し、中国を中心とした伝統的国際秩序回復を目指し、元の時に途絶えていた正式な外交関係を持つよう日本に働きかけ（＝朝貢関係の提示）、日本も足利義満が明の使節を京都に招いたり仏僧を中国へ派遣し（1373年～1380年）、15世紀になると対明積極外交を開始する。1402年、永楽帝は使節を送り、信書で義満を「日本国王源道義」と呼び、義満の「日本国王」としての正統性を認めて冊封関係の樹立を宣告した⁽⁹⁾。

日本を明の朝貢国にした義満（＝1403年、国書で「日本国王臣源」と称している）に対して古来、批判がある（ex.瑞溪周鳳『善隣国宝記』）が、そうした代償を払っても義満には自らの地位を天皇の地位に比肩すべきものに押し上げるメリット、政治的意味（＝箔をつける）があった。より詳しく言うと義満の「体面軽視外交」には次のようなメリットがあった。①北山第（金閣）の造営費の5分の1が遣明船の利益によるもので、個人的通商利益があった。②銅銭移入（明銭を輸入して通貨とした）による貨幣経済の確立という国家的目的の達成③通貨流通のコントロールによる幕府権力の確立④倭寇と地方豪族、南朝の残存勢力、中国の一部の勢力が結びつくのを防止する目的の達成⁽¹⁰⁾。

中国との関係で、内政上の思惑から中国ないし中国の「権威」を借用するといった政治手法、ないし類似の行動は今日でもしばしば見受けられ、「利」とは真逆に見える）小泉首相が靖国神社参拝問題で中国と軋轢をひきおこし、自らの立場を長期にわたって堅持し、かえって日本国民の人気を博したのも、中国を喧嘩の対象として内政上「利用した」側面を持っていたと言える⁽¹¹⁾。

かつて戦後、日本と中国の間に国交がなかった際、「日中友好団体」が貿易交渉を行った。「日中友好団体」に対して、中国側の主張に同調するように中国が要求し、それに対して貿易上の権益を与えた。その際、「日本を代表して交渉した者は、政府そのものの代表ではないが故に体面をいわば軽視して、中国の政治的主張を受け入れるのが通例」でそれは義満の「体面軽視外交」と類似のものであると識者はいう⁽¹²⁾。（もっともこれは政治、外交に偏した見方で文化からの見方ではない。新中国に「文化的」「精神的」な理想を見い出そうとした人々がいて積極的に関わろうとしたのも事実である。それは義満帰依の下^{もと}における^{もと}とは言え、中国と日本の折衷による北山文化、五山・十刹^{さつ}の制度^{もと}の下での禅宗文化、庭園文化についても言えることで、簡素と洗練を旨とする文化を積極的に宋、禅文化を吸収する中で創ろうとしたことも事実である。文化吸収は「利」「害」のみによって行われるのではない。）

日本は中国の国家の体面の問題に鈍感なところがある。数年前、日本の台湾における利益代表である、交流協会の代表が「台湾の法的地位は、国際的には未確定であるというのが日本の立場である」との趣旨の発言をしたとされ、台湾から事実上、退去を余儀なくされる事件があった。台湾の法的地位について、日本が何を公的に言うべきかという問題と国際法上（あるいは、米国などの、第二次大戦の連合団の立場上）、台湾の法的地位がいかにあるべきかの問題は分けて考えねばならない⁽¹³⁾という識者の言辭は正論であろう。

日明貿易は朝貢の形を採らなければならず、それに反対した4代将軍義持^{よしもち}の時に一時、中断したが、6代将軍義教^{よしのり}の時に再開する。朝貢貿易は滞在費・運搬費がすべて明側の負

担であったから、日本側の利益は大きく、とりわけ前述のように銅銭が大量にもたらされ、日本の貨幣流通に大きな影響を与えた。足利政権は銅銭移入によって貨幣経済を確立し、貨幣流通のコントロールによって幕府権力の確立を期した。明も日本を朝貢国（周辺諸国が使節を派遣したり、物を献上し、中国皇帝に臣下の礼をとることを朝貢という。）にすることによって冊封体制（中国皇帝が朝貢国の首長に王号や爵位を与えて、その領域の支配権を認知することを冊封という。）を強化し、自らの存在、王朝の正統性を強化することができた。政治的に言えば政権同士の相互利用であったと言えよう。

朝鮮半島では1392年、李氏朝鮮が建国され、通行と倭寇の禁止を求め、日本との間に国交が開かれた。日朝貿易は中国との勘合貿易と異なり、幕府だけでなく守護大名・豪族・商人なども参加して盛んに行われた。沖縄では、1429年、尚子が琉球王国を作り上げ、東南アジアとの海外貿易を盛んに行い、那覇は東アジアの重要な交易市場となり、琉球王国は繁栄した。

三、近世（16世紀末～19世紀半ば過ぎ）の日本の中国観

16世紀の末、織豊政権は動乱を鎮め積極的統一政策を進め、海外とも活発に交渉を行った。この時代の文化は桃山文化と呼ばれ、城と黄金に象徴される豪華で清新な趣を持っていた。その後を受けた徳川氏は3代将軍家光の時に幕藩体制を確立し、その頃の文化は桃山風の特徴を残す一方、武家に奉仕する封建文化を形成する動きも強まった。

信長の後継者である豊臣秀吉は、検地と刀狩を行い、後世に大きな影響を与えた。秀吉は明の征服を企て、1592年（文禄元）、西日本の大名を主力とする15万余の大軍を釜山に上陸させ（文禄の役）、一時は漢城（ソウル）を陥れたが、後、戦局は思うように進展せず、明との講和を計った。しかし、交渉は決裂し、秀吉は1597年（慶長2）、再度、14万余の兵を朝鮮に送った（慶長の役）が苦戦を強いられた。翌年、秀吉は病死し、全軍撤退したが、前後7年にわたる朝鮮出兵は明と朝鮮の反感を買い、膨大な戦費と兵力を費やして豊臣政権を衰退させることとなった。

1585年、秀吉は四国を平定し、1587年九州平定を達成した。1587年、諸大名を初めて同時に揃えて大坂城で新年の参賀を行っている。秀吉はいきなり朝鮮に軍事的進攻を始めたわけではない⁽¹⁴⁾。秀吉は対馬藩の知行安堵と引き換えに朝鮮との折衝を命じ、対馬藩は再度、使節派遣をして、秀吉天下統一祝賀の朝鮮通信使派遣を実現し、秀吉は聚楽第で通信使に接見する。その後、軍事力をちらつかせて、日本と明の朝貢貿易の再開、明との折衝に赴く日本軍の朝鮮半島通過（仮途入明）を要求した秀吉に対して、朝鮮側は、明との長年の友好関係を理由に秀吉の要求を拒否する。秀吉はそれに対して九州に軍事拠点を

構築して、1592年4月朝鮮半島へ進攻し、5月ソウル陥落、6月平壤の大同江で日朝交渉（日本軍の撤兵と日本の要求をめぐる）が行われたが合意が得られず、朝鮮側の要請もあり、7月以降、明軍が介入し、日本軍との軍事衝突に発展した。

秀吉は日本統一の完成によって「日本」の外辺を広げ、朝鮮、琉球を日本の属領、属国とみなす意識を強めていったと考えられるが、秀吉が中国まで適用範囲を広げたのはそれがポルトガルやスペインといった西洋植民地主義の東洋進出に対する対抗、より正確にはキリスト教排斥と日本、明、インドまで含めた「アジア」の共通価値である「神儒仏」の思想の擁護と連動していたとする識者の言辞⁽¹⁵⁾には広い思想視野が感じられる。もっとも「神儒仏」思想が「アジア」の共通価値であったかどうかについては慎重に考察する必要がある。秀吉の頭の中のアジアの共通価値としての「神儒仏」思想と現実の「アジア」の「共通価値」は必ずしも一致しないからである。

もう一つの秀吉の視点として、ソウル陥落直後、天皇を北京に移し、自分は居所を寧波にかまえて貿易を振興しようとしていたことが注目される。それは秀吉が自らの統治の正当性と権威を天皇の権威にだぶらせることによって強化しようとしていたことに胚胎する。また、秀吉の明「征服」の真の意図は、明の国使への丁寧な対応や明の文物に対する言動から見て、領土の征服より、むしろ東アジアにおける明の「威信」を自分も借りようとしたことにあるという見方⁽¹⁶⁾は義満の場合と同様、類似の思考形態であろうと思われる。

秀吉の「アジア」共通の価値である「神儒仏」思想はアジアを一つにしようとする思想である近現代のアジア主義を想起させる。しかし、それがアジア内部からの反発（ex.日露戦争の直前、戦中、韓国皇帝が一時的にロシア公使館に滞在していたのは、日本の台頭をロシア勢力によってバランスさせようとする考えに基づく⁽¹⁷⁾）や牽制（ex.1896年、日清戦争後の清はロシアに対して東支那鉄道建設の権利と鉄道沿線への守備隊派遣の権利を与え、日本を対象とした、攻守同盟を結んだ⁽¹⁸⁾）に遭ったのは、近代化しつつある日本も「排外」の対象としてとらえられる傾向があったことを物語っている。近現代の日本のアジア主義は「日本」を「盟主」とする支配のアジア主義であったと言われても仕方のない面が多い。また日本も清と「反西洋」の連合を組むことには慎重で1871年（明治4）日清修好条規締結の際、第二条の「苦し他国より不公及び輕藐する事有る時、其知らせる為さば、何れも互いに相助け、或は中に入り程克く取扱ひ、友誼を敦くすべし。」という内容に対して欧米各国から日清攻守同盟ではないかとの警戒の声が挙がり、外務卿岩倉具視は対欧米条約改正を控えて欧米からの疑惑に神経過敏になり、第二条の修正を計っている。（後任の副島外務卿は李鴻章に実施もしないうちに条約を改訂するのは不見識きわまると峻拒され、あっさり撤回し、批准交換の具体的な日時と場所の決定の運びとなる⁽¹⁹⁾。）

秀吉の跡を継いだ徳川家康を始まりとする徳川幕藩体制（＝幕府（将軍）と藩（大名）が領主権によって土地・人民を統治する政治体制）の樹立をおよそ 1630 年代とすると、明朝の滅亡が 1644 年であるからほぼ重複する⁽²⁰⁾。17 世紀後半から日清貿易は一時、盛んになったし、徳川幕府の権威を高めるためにも清との公的関係の樹立は好ましいはずであったのに日本は結局、清との間に公的関係を樹立することはなく内に「ひきこもる」。その理由は蝦夷地のアイヌが中国北方民族と協力して幕藩体制の安定をおびやかしかねないという懸念を幕府が持ち、また中国への西欧文化とキリスト教の浸透が日本に影響することへの恐れを幕府が持ったことによると考えられる。また、1715 年新井白石の正徳新令は日清貿易を従来の半分以上に制限するものであったが、そうした制限は金銀の流出を止める経済的動機もさることながら、中国人商人及びそれと結託する邦人による密貿易が盛んになることを懸念し、幕府の体面と権威を保つという、国内政治の動機による面も強かった。こうした要因が重なって、幕府は中国（清）を西洋とほぼ同じ「蕃夷の国」として鎖国の対象とし、1621 年以降、中国人との接触を、専ら長崎奉行所の管轄とし、1715 年の新井白石の改革（海舶互市新令）では、長崎来航の中国船は長崎奉行発行の「信牌」を持つことを義務化し、その書状では清の正式名称「大清」の使用を禁じ、年号は日本の年号を用いねばならないこととした⁽²¹⁾。

江戸時代初期の文化は幕藩体制が固まるにつれて、幕府の支配を反映した色合いが強くなり、学問でも儒学が主流となり君臣、父子、上下の秩序を重んじる朱子学が採用され盛んになった。京都相国寺の僧、藤原惺窩は朱子学を修め、還俗して朱子学を禅宗から解放することに努め、その門人で建仁寺の僧であった林羅山は徳川家康に用いられ幕政に参与し子孫も代々幕府に仕えた。林羅山をはじめ、幕府の官吏の中には、中国人を「蕃夷」と呼ぶ風習が定着していたが、中国を蕃夷扱いする背後には、日本が中華秩序の外に立ち（＝「鎖国」し）観念的には中国を日本的秩序の中にとりこむ政治意図があったといえる⁽²²⁾。

清朝は中国の伝統的な中華思想を継承し、西洋と日本をいずれも蕃夷の国と位置づけ、本来、中国に朝貢すべき国とした。しかし、朝鮮半島が地理的、歴史的理由はっきり中華秩序の内部にとりこまなければならないのに比べて、日本は観念的には中華秩序に従うべき国ではあったが、実際上は中華秩序の内部に是非とも位置づけなければならない対象ではなかった。徳川幕府が、中国を観念上「蕃夷」としても、実際上、中国が日本に朝貢を行っていなかった、ちょうど裏側で、清朝は観念的に日本を朝貢国扱いしながら、実際上は、朝貢関係を樹立しないまま事態が推移するのを意にとめないという対日姿勢を採っていたのであった。清も観念的な朝貢関係を日本に表明したことはある。その際、清は朝鮮を対日外交の窓口とした。かつて元朝が、対日折衝の窓口を高麗においたように朝

鮮を対日接触の窓口とした。1644年、清の順治帝は中国大陸へ漂流した日本人13名を日本へ送還することにし、朝鮮国王にその送還を依頼したが、そうした措置をとる理由として次のように述べている。清は「今ヤ内外ヲ一統シテ四海ヲ家ト為シ各国人民ミナ朕ノ赤子ナレハ務メテ所ヲ得サシメ以テ皇仁ヲ広ムヘシ」。自らの日本への考え（＝徳治主義＝日本の観念的朝貢国扱い）を表明しているのである。⁽²³⁾

徳川時代、日本は清朝と外交関係を持たず、中国も鎖国政策の対象としたが、それは日本が中華秩序の外にいること、更には中国を「蕃夷」と呼ぶ小中華主義をも持っていたことを意味する。そのことは明治維新の際、中華秩序からの脱出ということを李朝朝鮮やベトナムのように考える必要がなかったことを示唆している。もっとも「華夷」と並ぶ「洋夷」（西洋）への攘夷思想を開国思想へ転換するには明治5年頃までかかり、その際、（日本化した）儒教的「先王の道」から「万国公法」への思想的中心の転換があった。

思想面で、江戸時代には山崎闇斎のような独特な人物もいた。闇斎は日本神道を中国の五行説で解釈しようとした（＝垂加神道を説いた）人で、「天地の道理」というものは世界のどこであっても同じである、中国と日本でも同じである、そこで闇斎は「当時の最も進んだ理論」である洪範の五行説で神道を解釈しようとした⁽²⁴⁾。しかし、また中国の華夷思想を批判し、地形に高下はあるが、どこでもまん中でないところはない。どこでもまん中になって差しつかえない⁽²⁵⁾ということをいっている。また、中国における禪讓放伐論には反対している。中国のものをむやみとありがたがることもないし、むやみに貶すこともなかった。このことは闇斎に中国かぶれのようなところはなく、必要なものは採るという思想の持ち主であったことが窺い知れるのである。江戸時代の日本の中国観の一端である。

官学の朱子学に対して中江藤樹や熊沢蕃山は陽明学を学んだが、現実批判と矛盾を改めようとする革新的精神が幕府に警戒され、蕃山は幽閉され病死している。孔子、孟子の古説にたちかえって考えようとする古学派がおこり、山鹿素行は朱子学を批判して幕府によって処罰を受けたが、伊藤仁斎・東涯父子は京都の堀川に私塾古義堂を開き、荻生徂徠も私塾を開いて自説を講義した。荻生徂徠は政治・経済にも関心を示し、享保の改革の政治顧問をし、都市の膨脹を抑え、武士の土着が必要であると説いた。このように中国伝来の儒教も様々に日本的展開を遂げた。内藤湖南の中国の「とうふにがり説」はこの場合にも比喩的にはあるが当を得たものであると言えよう。

四、結語

以上、中世、近世と日本の歴史に即して、日本の中国観を通観してきた。日本の中国観

は地理的に朝鮮と異なり、中国と海を隔てた所で展開されたものであった。中国もまた、地続きの朝鮮とは異なり、朝貢関係、冊封関係を厳格に日本に行使する必要性を感じなかった。663年の白村江の戦いは日本の大陸への影響力の行使の願望と、新羅を救援せよと唐に言われ従わなかった日本が唐への非従属関係を明瞭にするために百済を救援したことによって起こった。元寇をかうじてしのいだ日本、「日本の神々に祈願して勝った」日本には「日本くらい尊い国はない」という思想が生まれ、日本文化の独立が成った。すでにこの時点で日本には小中華主義が生まれていたのである。義満の明の朝貢国となった「体面軽視外交」にはその中に内政上の思惑、理由から中国や中国の「権威」を借用するといった政治手法、中国観が存在した。秀吉による明の「征服」の真の意図は東アジアにおける明の「威信」を借りようとしたことにあるという見方も存在する。徳川幕府が清との間に公的関係を樹立しなかったのは、アイヌと中国北方民族の連帯を懸念し、中国への西欧文化とキリスト教の浸透が日本に影響することを恐れたからであった。もっともこうした日本の中国観は政治的、外交的視点からのものであり、「利」を中心とした中国観である。では文化的に日本の中国観を考えればどうなるかと言うと、やはり日本は中国を先進文化国と位置づけ、『懐風藻』『文華秀麗集』のような中国色濃厚な漢詩（文）集を作っている。もっとも同時に『万葉集』や『古今和歌集』も作ったのであり、日本の中国化と中国の日本化は併存していたと言えよう。内藤湖南の中国の「とうふのにがり説」は当を得たもので、近世までを通観したところによると、日本は文化的に中国という「にがり」によって日本を形成し、また文化的独立を保持していた。現在に比べると、当時の日本人、近世までの日本人はずっと中国のことを尊敬していたであろう。しかし、同時に日本にも小中華主義が脈々と流れていたことを我々は近世までの日本の歴史、日本の中国観を通観することによって了解するのである。

[注]

- (1) この元寇関係の記述は小倉（2013）pp.205-218に負うところが大きい。
- (2) 小倉（2013）pp.212-213
- (3) 小倉（2013）p.214
- (4) 小倉（2013）p.216
- (5) 小倉（2013）p.215
- (6) 小倉（2013）p.216
- (7) 小倉（2013）p.217
- (8) 内藤湖南（大正11）「日本文化の独立」内藤虎次郎（昭和44）第九巻 pp.110-129。この部分に

については特に p.125。

- (9) 以下の義満等の記述は小倉 (2013) pp.81-85、pp.166-172 に負うところが大きい。
- (10) 小倉 (2013) p.168
- (11) 小倉 (2013) p.85
- (12) 小倉 (2013) p.169
- (13) 小倉 (2013) p.170
- (14) この朝鮮出兵、明と日本の戦争の記述は、小倉 (2013) pp.200-204 に負うところが大きい。
- (15) 小倉 (2013) pp.68-70、pp.200-204
- (16) 小倉 (2013) pp.203-204
- (17) 小倉 (2013) p.71
- (18) 小倉 (2013) p.56、p.71
- (19) 毛利 (1996) pp.6-7、p.74
- (20) 以後の徳川幕府の中国観については、小倉 (2013) pp.108-120 に負うところが大きい。
- (21) 小倉 (2013) pp.110-111
- (22) 小倉 (2013) p.111
- (23) 小倉 (2013) pp.111-112
- (24) 闇斎の以下の記述は内藤湖南 (昭和 7) 「先哲の学問 山崎闇斎の学問と其の発展」内藤虎次郎 (昭和 44) 第九巻 pp.321-348 に負うところが大きい。
- (25) 同 (24) 書 p.333

[引用文献・参考文献]

- (1) 内藤湖南 (1924) 「聖徳太子」『日本文化史研究』 内藤虎次郎 (昭和 44) 『内藤湖南全集』 第九巻 所収
- (2) 内藤虎次郎 (昭和 44) 『内藤湖南全集』 筑摩書房 第九巻
- (3) 内藤湖南 (昭和 4) 「飛鳥朝の支那文化論入に就きて」 内藤 (昭和 44) 所収
- (4) 内藤湖南 「日本文化とは何ぞや (其の二)」 内藤 (昭和 44) 所収
- (5) 西尾幹二著 新しい歴史教科書をつくる会編 (平成 11) 『国民の歴史』 扶桑社
- (6) 小倉和夫 (2013) 『日本のアジア外交：二千年の系譜』 藤原書店
- (7) 内藤湖南 (大正 11) 「日本文化の独立」 内藤 (昭和 44) 所収
- (8) 毛利敏彦 (1996) 『台湾出兵 大日本帝国の開幕劇』 中央公論社 中公新書 313
- (9) 内藤湖南 (昭和 7) 「先哲の学問」 内藤 (昭和 44) 所収
- (10) 藤田昌志 (2012) 『日本文化概論 I - 地理編・歴史編 1 (原始・古代・中世・近世) -』 (私家版)